

やっぱり 良心的知識人はアメリカにもいた。

2015/2/8 須田 稔

「燃えさかる鉄の檻、リンチの木、残忍さは遠く離れた話ではない」と題した一文が2月6日 commondreams.org に掲載された。要約しよう。

「一人のパレスチナ人が、殺されたヨルダン軍パイロット、モアズ・アルカサス中尉の写真とポスターを持つている。2015年2月4日水曜日、西岸ラマラ市にあるヨルダン大使館前で、ISISへの抗議を表明したのだ」。これはAP通信のカメラマンが撮影したカラー写真のキャプション。

「彼らは鉄の檻に入れた彼を焼き殺し、地獄の苦しみに悲鳴をあげもだえ苦しむ果ての彼の死を嘲弄したのだ。

「この残酷無比の殺害を次々報道するのを聴いていて、私は眠れなくなった。過去が思い浮かび、昔、テキサスの大学図書館で見た事のある、ぼんやり思い出される1枚の写真をくつきり思い描こうとした。突然、夜中の二時頃、全体像がはつきりした。居間に急いで降りてコンピューターに打ち込んだ。“テキサス州ワコ。リンチ”。

「確かにあった。黒人青年の黒焦げの死体、テキサス・バイブル・ベルトの中心部で火ぶくれした木に縛り付けられて。その焼け焦げた死体のそばで、白人青年たちがここにやにや笑っている。死のカーニヴァルで最前列で見物できて大喜びしているみたい。一人が実家へ絵はがきを送った。「これは昨夜のバーベキュー。上に十字架をのつけてあるその左が僕。あなたの息子ジョーより」。

「犠牲者の名前はジェシー・ワシントン。1916年のこと。アメリカは、まもなく「民主主義が安泰の世界にすべく」ヨーロッパで参戦するところだった。父は12歳、母は8歳、私はその18年後に生まれたのだが、そのころでも、まるで昨日のようように、ワシントン処刑のことを地元の白人達は話していたっけ。中世ヨーロッパのことではない。宗教裁判ではない。旧世界で、教会が権威をかさに火あぶりにした異教徒は一人もいなかった。ところがテキサスで起きたんだ。写真に写る白人は、農民、労働者、商店主で、何人かはワコの町内外の教会の尊敬を集める会衆であった。

「ここにその写真、木に縛り付けられたワシントン

の硬直した躰を良く見てください。白人女性を殺害した廉で死刑を宣告されたのだが、証人はいないし、自白したとされるが、真実が明らかになることはないだろう。大陪審はわずか4分で有罪判決を伝え、上訴・再審理・刑務所入りもなし。法廷内の暴徒が彼を外へ引きずり出し、身動きできぬように仰向けさせ、鞆丸を切除したのだ。かがり火が手早く造られ、点火され、2時間のあいだ、ワシントンは炎の中を持ち上げられたり下ろされたり、繰り返しくりかえし。市の職員も警官も咎めないうで傍観。いくつかの推定では、見物人は1万5000人にもなった。嘲罵・喝采・高笑。歓喜の叫びもあったと報じられている。

「炎が消えると、ワシントンの躰は切り刻まれ、記念品として売られ、パーティーは終わった

「何年も後、青年のわたしはワコの町にあつて、テキサス・バプティスト・ヴァチカンとも言われるベイラー大学を訪ねた。教職のポストを与えられたのだ。構内のアームストロング・ブラウニング図書館に少時居た。ロバートとエリザベスのブラウニング夫妻の作品を所蔵し、ステンドグラスの窓、大理石の柱、優雅な天井、フロレンスにあるミケランジェロのローレンシアン図書館の豪華絢爛の内部を思わせる、美しさでは米国有数なのだ。ここに座って、この聖域の美と静寂を、地方紙発行者ハリー・プロヴァンスから見せられた写真との隔たりは埋められないと痛感した。

「1905年、ワコでまたもや黒人がリンチされたとき、ベイラーの学長はリンチ反対運動の指導者になった。町はなおも分断されていた。

「1882年から1968年までに記録されるリンチは4743件。約4分の1は白人。黒人に同情したからだ。父は1904年生まれだが、子どもの頃の新聞写真を保存していた。町の中心部で黒人の男が拷問され吊されのを、ピクニックみたいに何千人もが集まっているのだ。何年も後ルーツ探しの旅をして、リンチがあった場所の近くで父は口がきけなくなった。

「ヨルダンのパイロットの恐ろしい最後をニュースで聴いた夜、なかなか眠れなかった。ISISは呪われてあれ!」と思った。が、次の瞬間に思ったのだ。我々自身の野蛮人はゲートで待つ必要はないのだ。野蛮人は内部にいる。母国育ちだ。信心深いのだ。隣人、友人、親族。我々みたいな人びと。」

著名なジャーナリスト、ビル・モイヤーズの文章だ。